

第2章 ニューデリー日本人学校との交流 —4枚の組写真を使って—

水越 敏行・久保田 真弓

2.1 はじめに

世界に点在する日本人学校を結んだ交流学习に関しては、平成12年に出版された『インターネットでつながる日本人学校 文部省委嘱研究報告書』がある。世界に点在する複数の学校が参加することにより月の観測などが、多角的な視点でできることや、テレビ会議の利用で時空間を越えて交流できることが丁寧に紹介されている。特に、海外でインターネットに接続するには、電源プラグの形状にも注意する必要があることや、テレビ会議開催に至るまでの準備についても詳細に説明が施されている。

このように日本人学校との交流は、決して新しいものではないが、技術が進歩し、テレビ会議等がさらに手軽にできるようになった現在、あらためて交流を実践し、見直してみる意義はあると思われた。その背景に、日本人学校が置かれている学校の実態がある。

2.2 日本人学校に「風穴をあける」——インドの二つの学校視察記録から

バンコク経由でインドのニューデリーに入ったのは、2008年7月29日の昼前であった。比較的アジア諸国には、出かける機会の多い私たち3名（水越敏行、久保田賢一、久保田真弓）ではあるが、インドの首都は、初訪問。人口1,000万といわれても、交通システムがまだ不備で、トラック、タクシー、乗用車、バイク、自転車、乗り合い自転車などが混在で、道路を走る様子には、驚嘆した。

正式に訪問した学校は、2校である。

(1) ニューデリー日本人学校



学校概要

生徒数：123人

教員数：20人、現地スタッフ20人

特徴：3-5歳児の幼稚園も併設。

英語力：

英語は4年以上レベル別。英検2級をとる子もいる。

滞在年数：平均3年

国際交流に関して

主にゴエンカ学校と交流。国際理解教育、総合の時間を利用。
インド人とパートナーにして交流させている。

国際性育成の目的で

- 1-3年 1時間・1週間
- 4-6年 2時間・1週間

生徒・保護者の特徴

- 1) 生徒の体力が劣ってきている。
- 2) 進出企業の関係で生徒が増加傾向にある。
- 3) 父親の学校へのかかわり度が大きい。父親7割、母親10割
- 4) 保護者の教育への関心が非常に高い。

学校の特徴

① 日を置いて二回この学校を訪問したが、着任早々の校長がご病気で入院されており、われわれの滞在中には、お目にかかれなかったのは、残念であった。ただ合田一美教頭先生は、終始私どもと対応してくださったし、旭川で全国放送教育研究会を開いたとき以来、水越とは長い交流もあつてのもので、直ぐに校内の事情などの話題に入れた。

校舎そのものは、日本のどこにでも見かけるものであったが、校舎の中央部に、広大な階段状の広場があり、緑の芝生とレンガ積みの座席が、きれいに手入れされていた。全員集合して、横浜に帰国する姉妹の送別会なども、ここで開かれ、大勢の母親もお別れに参加していた。

図書室、パソコン教室、体育館なども視察したが、いずれの施設も十分に活用されていた。教室の掲示も、日本の学校ではどこでも見かけるようなものであった。

② 学校への往復は、全てスクールバスを利用しており、朝の始業前は、市内各地かスクールバスが、一時に集中する。放課後は、部活動をする児童もあれば、直ぐに帰宅する児童もある。特別活動などで、居残りをするクラスも出てくる。したがって、帰路はまちまちで、校外に多くのバスがスタンバイしている。公共の交通機関や自家用車を使うことは、ほとんどないので、市内各地とつなぐ往復のスクールバスは、学校活動を規定しているとも言える。

③ この日本人学校は、タクシーの運転手が道を知らないくらいで、現地の人たちや教育関係者とも、かなり隔絶されている。教師は3~5年で交代するようだが、現地の学校や、後述するインターナショナル・スクールとも、交流があまりない。学校への往復はバスのみ。日本人学校という「閉じた空間」での生活に風穴を開けるのは、容易なことではないし、親の了承も取りにくい。

④ こうした諸事情を考えると、日本の学校との定期的な交流学习は、海外日本人学校

にとって、よい刺激になるし、教育的価値が大であるといえる。むしろ交流の相手校である金沢市立夕日寺小学校よりも、ニューデリーの日本人学校の方に、より新鮮な風が吹き込むように思う。

夕日寺小学校は、以前の場所から移転して新築された学校だが、校舎は完全なオープンスクールで、教室と廊下はもちろんだが、教室間の仕切りもない。グラウンドも広く、プールも美しい。夕暮れ時は、裏山の緑と深紅の花が教室の窓から眺められる。地域の住民にも校舎の一部が解放され、音楽会には近隣の星陵高校の生徒が、応援の演奏に駆けつけてくれる。学校の近くでは、北陸高速道路や、金沢市の山側環状線が走っており、ニューデリーの道路の混乱とは違って、高速道路、普通道路、人道が整然と区別されている。

⑤ こうした道路整備の問題、あるいは登下校の風景、有名な近江町市場での新鮮な魚介類とか野菜の展示、特に年末年始の売買風景、冬の雪道では、センターライン付近から地下水が噴出して、雪を溶かす装置。道路の両脇には、桜と紅葉の木を交互に植えて、春と秋の季節を教える工夫。これらの雪国の美に、金沢市の子供は気づいていない。

学校の周りの四季の変化を写真に取り込み、「組み写真」にして、海外の日本人学校に電送する。「冬が来ました。雪の備えを！」というような一言を加えて。金沢の子供たちは、この毎日見慣れた風景に、季節の移り変わりが演ずる「自然の美」に気づいていない。インドからの質問で、あらためて周りの変化と周到な工夫に気づくのであろう。

海外日本人学校と日本の学校の教師たちも、このような「交流の鍵」を見忘れてはなるまい。メールの交流だけなら海外の日本人学校を選ぶ意義がないと思う。

(2) タゴール・インターナショナル・スクール (私立学校)

Tagore International School

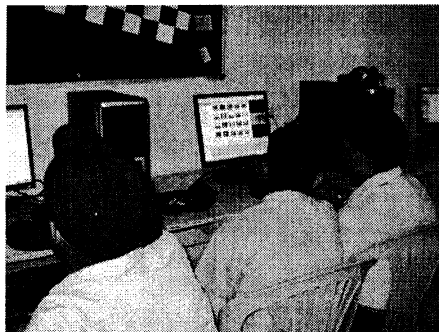
学校概要：

生徒数：188人 (インドの学校の平均は、3,000人なので少ないほう。)

1クラス 14人の生徒数

うち15カ国からの留学生：パキスタン、ネパール、スリランカ、中国、フィリピン、ロシア、ナイジェリア、ケニアなど。

身体障害者2名、盲人20人



学年：保育園から Grade 12 まで

教師数：95人

事務員：6人

国際交流経験：

- 1 英国
- 2 中国
- 3 日本人学校との交流
 - ①日本の音楽とインドの音楽 学校発表会
 - ② 15周年記念 インドと日本で
書道、いけばな、「映画鑑賞 7人の侍」 折り紙 和太鼓
 - ③日本訪問

学校の特徴

実はこの名門の私学には、初日に訪問した。日本人学校へとタクシーの運転手に告げても、場所を知らない。そしてこの学校に連れて行き、そこで門衛に日本人学校の場所を聞くつもりらしかった。私たちは元々この学校訪問も約束していたので、この学校から先に見学することに変えたのである。

幼稚園から高校まで揃い、男女共学のインターナショナル・スクールは、アジア諸国どこにでもあるが、この学校には、私たちが強くひきつけるものが、いくつもあった。濃い茶色を基調にした3～4階建ての建物が、緑の芝生のグラウンドをぐるりと取り囲むという構造であった。校長も研究主任も女性で、終日私たちの希望する施設や教室を、丁寧に案内してくれた。いくつか気のついたことをあげると、

- ① 幼稚園から高校までを収容しながら、授業開始と共に、雑音が一切消える。
- ② コンピュータはどの部屋にも豊富にあるが、目的に応じて、メディアの組み合わせ利用がされていた。見学時には、コンピュータの授業を視察したが、盲人の生徒3人も一緒に授業を受けていた。日本人学校と比較するとタゴールインターナショナル・スクールのほうが、コンピュータの使い方に、多様性、個別性、随時性、道具性が顕著に見られたように思われる。
- ③ 教室の掲示もカラフルで、多様性がある。ほとんどが生徒の自作。
- ④ 1回の通路には、元素の周期律表とか、太陽系の星の位置や距離などが、通路に掘り込まれていた。その上を毎日通りながら、覚えたり、記入していくらしい。
- ⑤ 小学校から、英語とコンピュータは大幅に取り入れられ、特にコンピュータは、物を作ったり、データをまとめたり、検索や交流にも、ごく自然に使われていた。小学校高学年や中学の美術の授業では、素描も、配色も、背景も全てコンピュータで試み、しかる後に、筆に絵の具をつけて、本来の絵を描く、というステップが見られた。
- ⑥ 廊下に並んで本やノートを持って並んでいる男女の生徒は、正解が出せなかったか、何かを忘れてきたことの「罰」であるという。
- ⑦ 教室や渡り廊下の掲示物も見事な作品で、どれもが時間をかけて丁寧な仕上げであった。
- ⑧ ともかく研究主任の女性が終始、私どもを案内し、児童生徒への質問も仲介し、日本人学校から駆けつけてくれた英語の教師（インド人）も加わって、Team-Teaching,

交流学习、美術とカメラ、音楽とパソコンなど、新しい分野を開発する意欲が、教師たちから聞くことができた。

以上に列挙したこのタゴール・インターナショナルスクールのカリキュラム、教授＝学習システム、芸術教科群へのパソコンの導入、集中と発散の巧みな組み合わせなど、十分に学ぶべきものがあった。

2.3 学校間交流の概要

前述の通り、ニューデリー日本人学校では、タゴール・インター・ナショナル・スクールのような現地校との交流もあるが、基本的には、学校と家庭をバスで往復するだけの限られた範囲の生活空間で勉強をしている。そこで、あえて日本の学校と交流することにより、あらためて周りの文化の違いなどに気づくのではないかと考え、4枚の組写真を利用して交流実践することにした。そこで2007年5月、文部科学省の担当者を通して交流相手を探し、結局、以下の2つの学校間交流が実現することとなった。

(1) 学校間交流 1

交流期間：2007年9月から2009年3月までを予定

交流学校と生徒：インド・ニューデリー日本人学校

6年生（1学期16人 2学期20人、学期途中でも転出入がある）

（在籍児童・生徒総数 小学部66名、中学部23名 だが変動有）

6年生担任 情報も担当

金沢市夕日寺小学校 6年1組27人、2組27人

（在籍生徒総数 360人）

(2) 学校間交流 2

交流期間：2007年7月から2008年3月まで

交流学校と生徒：ミュンヘン日本人学校 5年生 12人

（在籍児童・生徒数 小学部101名、中学部36名）

金沢市米丸小学校 写真クラブ 8人

（1学年4学級の大規模学校 全校生徒850人）

ニューデリー日本人学校では、6年の担任で情報も教えている教員が交流を受け入れ、夕日寺小学校の6年生2組全員と交流することになった。

一方、ミュンヘン日本人学校は、小学部の主任を通して連携することとなり、3、5、6年が対応してくれることになった。ただし、ミュンヘン日本人学校では、ドイツの規定で通常の日本人学校のカリキュラムのほか、ドイツ語を学ぶ時間が週6時間あり、自由に交流する時間が、非常に取りにくいことがわかった。また、交流する生徒数のバランスから米丸小学校では、写真クラブが対応することとなった。

本報告書では、紙幅の都合上、ニューデリー日本人学校と夕日寺小学校の交流について取り上げ報告する。

2.4 交流の目的と方法

ニューデリーの日本人学校と夕日寺小学校との交流にあたって、単なる電子メールのやり取りだけでなく、4枚の組写真を利用することを前提とした。日本人学校との交流であれば、海外の現地校との交流と違い、言葉の問題はない。むしろ同じ日本人であるから共通点が多いと思いがちな点を掘り下げることとした。

ニューデリーの日本人学校には、全国から生徒が集まってくる。そういう意味では、生徒のアイデンティティは、学校があるニューデリーではなく、それぞれの出身地である。また、一般に保護者の意識は、現地理解よりも帰国後の日本へのスムーズな適応にある。

一方、金沢の夕日寺小学校には、そこで生まれ育った生徒が集まっており、金沢の地域性は、あまりにも身近すぎて見過ごしているところがある。そのような背景を持つ生徒らの交流として以下のような目的と方法で、交流を開始した。

(1) 交流目的

- *小学生は、日常の生活をどのように捉えているかを知る。
- *身近な日常の生活から、その背景にある互いにおかれている文化について気づきを促す。
- *写真を媒体にして文章表現を工夫し、相手にわかりやすく伝える。
- *交流から自分の生活を振り返る。

(2) 交流方法

- *身近なデジタルカメラを利用して自分自身の一日の生活などを4コマの組写真で表現する。
- *ウェブ上の電子掲示板に公開し、互いに見て、表現活動につなげる。

(3) 組写真を利用する理由

- 1) 身近な日常生活の一日を4コマという限られた写真で表現することにより、各生徒が、なにを強調して、相手に伝えたいか、が浮き彫りになる。
- 2) 写真を媒体に、本人が組み写真の説明をしたり、相手が写真だけを見て、理解したことを述べたりすることで、表現活動が促進できる。
- 3) 各生徒が切り取った4コマ写真を比較し、共通点、相違点を見出すことより、身近なところから、文化が垣間見られる。
- 4) 映像の力と文章の力を認識する。

ただしここでいう文化とは、伝統文化や民族衣装等の紹介のことではなく、日常生活や習慣に表れる人々の価値観を表出した文化のことを主にさす。たとえば、衣食住では、昼食のお弁当や給食、掃除当番、制服、ランドセル、色使い、集団行動、時間の使い方などが考えられる。

以上のような目的意識を持って交流を開始し、具体的には、交流主体であるニューデリー日本人学校と夕日寺小学校の先生方同士で適宜テーマを決め、随時修正を加えながら進行してもらうこととした。

2.5 交流結果

ニューデリー日本人学校と夕日寺小学校では、地域の違いから、学年暦が多少違う。ニューデリー日本人学校の、1学期は、4月から始まり8月下旬までだが5月下旬から6月一杯が夏休みとなる。したがって1学期の交流は、その点を考慮して、まずニューデリーが夏休み前に学校紹介文を送り、それを受けて夕日寺からも自己紹介文を送り、ニューデリーは、休みが明けてからそれに答えて返事を交換する形になった。夏休みの時期が異なるので多少変則的ではあったが、ゆっくりのペースで交流を始動することとなった。しかし、初対面の交流であり、交流そのものに授業時間をあまり割けないことから、ペーストとしては、月一回ぐらいで充分と思われた。

2学期は、ニューデリーも日本も9月からのスタートなので学期のズレに関する配慮は必要なかった。

平成19年度の交流内容は、平成19年7月から11月の前半と、12月から平成20年2月までの後半に分けられる。

前半では、自己紹介、学校紹介、合宿の報告（夕日寺小学校）、修学旅行の報告（ニューデリー日本人学校）が行われた。

後半は、夕日寺小学校がピオトープなど環境教育に長年取り組んでいることから、テーマを「環境」に決め、夕日寺小学校が主導となり進めることとなった。

前半の交流結果

前半は、ニューデリー日本人学校16人が、夕日寺小学校2組54人と10グループに分かれて交流した。交流件数は、表1の通りである。

表1 前半のやりとり

グループ	投稿件数	初回の投稿—最終の投稿
1	3 7	7/19 – 11/8
2	3 4	7/19 – 11/29
3	3 5	8/13 – 11/12
4	3 2	7/19 – 11/29
5	2 3	8/13 10/29
6	2 9	7/19 – 11/29
7	3 5	7/19 – 11/5
8	3 4	7/19 – 11/5
9	2 2	8/13 – 10/29
10	2 5	7/19 – 11/29

限られた授業時間で各校とも対応しているのに、投稿件数の違いが、交流の質を決めるものではない。ただ、1グループの件数が多いのは、メール投稿の際に個人名が出されていることにもよるのではないかと考えられる。個人の顔写真と紹介文があるので各グループのメンバーは、お互いにグループのメンバーについては判ることになるが、投稿の際に

誰が誰宛に書いた文章なのかを個人名を出して記す場合と「ニューデリー日本人学校」としてまとめて記している場合があった。その際、個人名であって先がある場合は、さらにその人が返信を書くことになるので投稿のやり取りが続いている。やり取りの内容は、「自分は犬を飼っているが、Aさんはいかが」「自分は、カレーが好きだが、インドのカレーはどんなものか」など自分と相手の関心事、趣味などで共通点を見出そうとしている。インドのカレーは「ナン」や「チャパティ」というパンで食べるという説明のあと、その写真を送って欲しいというところまでいったが、時間的な制約等でそのやりとりは終わっている。

自己紹介を含めた学校紹介では、例えば、図1のように図書館を説明するのにも自分がカーペットに横になり漫画を読んでいる様子の写真とともに紹介している。これは、空間に自分たちの存在を明確に位置づけた効果があると思われる。単にパンフレットにあるような学校紹介の写真とは違い、写真の読み手が、交流相手の様子を具体的に知ることとくに親近感を抱かせることになるとと思われる。

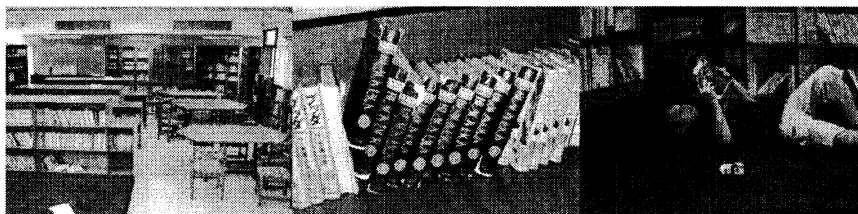
図1 学校紹介 「ブラックジャック読みたい？」

「こんにちは！！ここは私たちの学校の図書室です。絵本や図鑑、小説などいろいろな本があります。

小説などもありますが…マンガの『ブラックジャック』があります。

他にも『はだしのゲン』『三国志』などがあります。

図書室には青いカーペットがあります。ここで絵本、紙芝居などがゆっくり読めます。」



合宿や修学旅行の様子に関しては、特に紹介したい事象が増えるのでどのグループも多様な写真を紹介し、その説明文も長く、勢い良くなっている。例えば、インドのアンベール城や本田工場見学について、また金沢での合宿でおこなわれた肝試しなどについての紹介があった。

身の回りの文化理解に関しては、夕日寺小学校の生徒からの質問に答える形で、いくつか記述が見られる。ただし、ほとんどが否定的で、あまり話題としては広がっていなかった。例えば、「僕たちの、学校の近くには、遊べるところがぜんぜんありません。でも、行きませんが、池があります。インドでは、学校の外では遊べないのであまり楽しいところがありません」というようなものである。他には「川が汚い」、「象はあまりみられないが、牛はたくさんいる。」といった感じである。また、自己紹介文に「インドでは、コック、メイド、ドライバーを雇っています。」とあり、それに対して「お金持ちですね」と聞かれると「僕は金持ちというわけではありません。インドに住んでいる日本人はほとんどドライ

パーとコックとサーバントを雇っています。と言うのは雇わないと生活が出来ないからです。そのくらい厳しい生活環境です。ついでに、お給料は結構安いです。」という説明が返ってきている。それに対して、さらに質問が続くという形は、時間的な制約からなされていない。したがって、長くても3回程程度の個人的なやり取りでおわっている。

後半の交流結果

後半は、話し合いの結果、夕日寺小学校が取り組んでいる環境教育から、草花、森林、水、土、生物、などテーマ別に、交流することとなった。

表2 後半のやり取り

回数	夕日寺小学校1組 (件数)	夕日寺小学校2組 (件数)
1 回	12/10 草花 6件	12/13 ビオトープ 6件
2 回	12/11 森林 8件	12/14 水・川 5件
3 回	12/11 水 5件	12/14 森・木・葉 7件
4 回	12/25 土 1件 (返事なし)	12/14 生き物 6件
5 回	0件	12/14 土 7件
6 回	0件	2/1 雪 3件 (返事なし)

交流は、双方のやり取りというより、夕日寺小学校が提示した組写真に対してニューデリー小学校の生徒がコメントする形式になっている。授業時間の関係で表2のように6回まで行われた。

夕日寺小学校では、具体的なテーマを決め、写真撮影、写真選択、写真の組み合わせ、ストーリー作りに入念な時間をかけ、メディアリテラシーの力も育成することを目標とした。したがって、組写真を掲示板にアップし、ニューデリー小学校の生徒に提示するまでに時間がかかっており、結果的には、表2の通りテーマ別に、一組の組写真が提示され、それに対するコメントをニューデリーからもらうところまでで終了した。なお、夕日寺小学校では、写真撮影技術については外部講師村井先生による出前授業を行っている。そのときの児童の感想を資料として添付しておく。また、金沢には、著名な洋画家であり、写真展でも続々と作品が受賞され、ここ数年展示会もしていらっしゃる金沢大学名誉教授、現金沢学院大学教授吉田貞介先生がいらっしゃる。夕日寺小学校の生徒たちは、吉田教授のもと、風景写真、人物写真、組写真などの基礎についての手ほどきを受ける機会もあった。

一方、ニューデリー小学校では、生徒が自由に学校の外に出て写真を撮るという環境がないため、教師が100枚近く町の様子など生活に関する写真を撮影し、それを生徒に提示し、生徒が写真を選択、組み合わせ、ストーリーを作るという取り組みを試みた。しかし、自分でシャッターを押していない生徒は、印象深い写真を1枚は選択できるが、組写真と

なると選択できなかったという(担任教員へのインタビューから)。そのため交流期間の後半では、ニューデリー日本人学校からの組写真提示は、行われなかった。このことから、4枚の組写真にするには、はじめから意図したメッセージをもっている必要があり、そのメッセージを理解している者にしか、うまく写真として事象を切り取れないことがわかる。

2.6 考察

写真1枚ではなく組み写真を用いて交流するという前提で、ニューデリー日本人学校と金沢夕日寺小学校の生徒同士が交流した。

その結果、組写真にするには、常にストーリーを意識しなければならないので、1枚の写真を送付して事象を紹介するのは異なる取り組み方や時間枠が必要であることがわかった。相手に自分が考えたストーリーがわかるように写真を撮影し、そのなかから写真を選択し、組み合わせを考えなければならない。それには、ストーリーを考え、シンボリックシーンを撮るなど写真撮影の技法を学び、ある程度の時間をかけ練り上げる必要がある。

特に後半の交流では、夕日寺小学校担任教員の考えで、電子掲示板を美術館にみたくて展示する感覚で、4枚の写真を提示し「この4枚の写真からどんなことがわかりますか」と相手に問うかたちで、メディアリテラシー育成をめざした。その意味では、ユニークな取り組みが出来たと思われる。意図したメッセージが相手にどのくらい伝わるのかに着目し、相手からの返信でうまく伝わっていないことがわかった場合は、なぜうまく伝わらなかったのか、さらに児童と検討を加えている。この「メッセージ認識のずれ」を主に分析した結果は、泰山・遠海・久保田・久保田(2008)を参照していただきたい。なお、受け手であるニューデリー日本人学校の生徒は、いくつか上げられた写真の中で、どう見てもわからないものがあつた場合、正直に「よくわからない」と伝えることに躊躇していた(担任教員へのインタビューから)。結局「2枚目の写真はなんですか」というように質問しているが、残念ながら交流期間や授業時間の制約から、それに答えて、さらにやりとりが継続するところまでには至らなかった。

4枚の組写真で意図したメッセージを相手に的確に伝えるには、どのような内容だとよいのだろうか。前半でやり取りされた修学旅行や合宿の写真では、アルバムに4枚の写真を貼る感覚で、写真が提示され、文章でも楽しかったことが伝えられている。どちらかといえば、「写真は文字情報を捕捉する役割として使用されている」(泰山他、2008)。また修学旅行で見学した場所を時系列で紹介したり、工場見学など楽しかった場面を提示しているので、4枚の組写真をストーリーとして理解する難しさはない。訪問した場所、見学した場面、というくくりで提示された切片のため、違和感なく受け入れられる。つまり4枚の写真の関連性は、時間の前後のみなのでわかりやすいのではないだろうか。

一方、後半での取り組みでは、「自然の良さ」というメッセージ内容は、伝わりやすかったが「自然を管理する大変さ」というメッセージを4枚の写真で提示したところ「自然を大切にしている様子」と受け取られてしまい、双方で認識のずれが生じている(泰山他、2008)。これは、写真では、否定文を表現できない(雨宮、2000)ということによるのではないだろうか。「大変さ」という否定的なメッセージを写真だけで伝えるには、芸術的に相手の気持ちに訴える必要があるのかもしれない。それには、写真の提示の仕方にかかなりの工夫がいることになる。そこが、4枚の組写真作成の難しさで、伝えたいメッセージの

内容によっても必要な写真撮影技術や取り組む時間枠が変わってくると考えられる。

さて、4枚の組写真を使って交流学習をすることにより異文化理解は、深められたのであろうか。食べものに関しては少し話が弾んだようだが、日本と比べ「川が汚い」というところからインドにおける「川」に関してレポートするというような発展はなかった。一つには、先述したように容易に学校外に出て写真を撮る環境になかったことがある。さらにニューデリー日本人学校の担任者によると、児童たちはインド人にたいして偏見がある、という。それは、家庭の中で、すでに築かれてしまっている。親自身がインドに対して偏見を持っている場合があるうえ、子ども達が接するインド人は、家庭にいるサーバント（お手伝い）や、ドライバーのみで、両親たちが彼らや彼女らに命令をしているところばかりを見ている。したがって自分たちが実際にインドに住んでいるにもかかわらず「こんな汚いインドの川」を何で紹介する必要がるのか、という見方になってしまい、なかなか今回の交流をとおして現地理解につなげるのは、難しかったようだ。

しかし、平成20年度に交流している学年は、昨年度の学年と違い、インドに進出してきた日本企業関係の子どもたちもおり、インドの生活習慣に関しても好意的な見方をしており、学年全体の雰囲気も違うようだ。子どもたちがインドをみる姿勢は、親の影響も大きいようだが、クラスのムードメーカーが、インドをどのように見ているかによっても、影響されるのだろう。同じ教員が担当しても生徒のインドに対する見方は、学年によってかなり違うという。

最後に、4枚の組写真で説明するというので、今回の交流では電子掲示板を利用した。交流の趣旨に合わせて掲示板も掲載した写真4枚が並び、文字も写真のそばに入力しやすいものにした。しかし、デジタルの限界はある。写真にじかに吹き出しをつけて会話文にするなどは、容易ではない。したがって文章は、写真の説明になりやすい。

また、掲示板は、グループ別になっているので、他のグループの様子は、簡単に一覧にならず、わかりにくいところがある。また、投稿したメールに対しての返信は出来るが、その返信に対する返信の機能はついていない。別のスレッドを立てるしかないので、やり取りの継続性が視覚的には追いにくくなっている。写真4枚の提示をわかりやすくし、さらにその後のやり取りをどのように提示するかは、今後の課題である。

7 おわりに

4枚の組写真を使ってニューデリー日本人学校と夕日寺小学校との交流を実施し、組写真利用における交流の意義について検討した。組み写真を利用するにあたって、ある程度の授業枠を確保すればメディアリテラシー育成の観点から取り組むことが可能であること、伝えたいメッセージの内容によっては、写真は必ずしも容易な伝達手法ではないこと、文字と写真の組み合わせ如何で掲示板を美術館に見立てることも可能であることがわかった。2つの交流校とも時間的余裕があまりない中での交流であったが、初年度の交流としては成果があったと思われる。

平成20年度は、やりとりがヶ月単位など間遠になる交流だが、つねに交流相手がいることを忘れないように工夫し交流することを課題としている。そして組み写真のさまざまな可能性をさらに追求していく予定である。

謝辞

本交流学习の目的に賛同し、お忙しいなか交流を実現させてくださったニューデリー日本人学校担当教員皿谷先生、夕日寺小学校担当教員細川先生、平木先生、また、子どもたちに組み写真の基礎を教えてくださいました金沢大学名誉教授、現金沢学院大学教授吉田貞介先生、出前授業をしてくださった金沢星稜大学教授村井万寿夫先生に厚く御礼申し上げます。先生方のサポートなしには、このような交流学习は実現しなかったと思います。皆様方のご尽力に感謝申し上げます。

参考文献

雨宮俊彦 (2000) 「視覚表示と表現の記号論 (1) ——視覚記号の原理について——」 関西大学『社会学部紀要』32 卷 1 号 p.89-141.

板橋美子・増永良文 「シーンを構成する文章中の連続文と画像の対応付けの研究」

内海博文・西端律子 「映像と学習 「遊び」としてのコミュニケーションの可能性」

泰山裕・遠海友紀・久保田真弓・久保田賢一 (2008) 「交流学习における映像制作の実践分析」『日本教育メディア学会研究会論集』24 号 p.9-14.

資料 夕日寺小学校で学外講師による写真撮影に関する出前授業を受けての児童の感想

- ・ 見方によっていろいろな感じ方があるから写したいことをしっかり写さなければいけないと思った。
- ・ 適当にたくさん撮って、その中で一番いい写真を 1 枚選ぶよりも、1 枚の写真を中心にこめて撮るほうがずっといい写真になると思った。デジタルカメラでは便利すぎて簡単に写真を撮ってしまいがちです。そういう時代だからこそ、1 枚 1 枚を大切に撮ることが大事になってくると思います。
- ・ 例えば、ピオトープの写真で伝えるには、その伝えたい目的で決めて選ぶことです。自分だったらどんな花を写すか。僕だったらこの花はピオトープに書を与える花とそうでない花とを知らせればよかった。
- ・ いいと思った順位は 1 言葉と写真、2 言葉だけ、3 書くだけ。言葉と写真では話の様子が思い浮かんだからです。今度から、一番伝えたいことを考えて写そうと思いました。
- ・ 写真をとったり選んだりするときは、もっと考えて選びたいと思った。
- ・ ピオトープの写真は 1 枚だと決めづらかったけど、2 枚では選びやすかったです。1 枚でなく、伝えやすいように増やしたらいいと思いました。
- ・ 写真の撮り方によって伝えることが変わるということが分かりました。学校の写真は、私は 7 番だったけど、3 番の人がほとんどでした。
- ・ その人その人で見方が違うし、相手がどう見るかどう考えるか考えて写真を撮りたいと思った。
- ・ できるだけ見方が少ない方がいいということになります。
- ・ 自分の伝えたい内容に合わせてどんな写真がいいのか、どんなふうに撮れば伝わるか

を考えながら撮ることが大切だと思いました。

- ・ 私も写真を撮るときは近くで撮ったほうがいいか全体的に撮った方がいいか考えて撮ろうと思った。
- ・ 何枚も撮れて消せるからといって適当に撮らずに 1 枚 1 枚を慎重に撮ることの大切さを学んだ。
- ・ ちゃんと意識して撮らなければ相手に伝わらないんだなと思った。
- ・ 相手に伝わるかを意識して写真を撮りたい。5 年生やインドの人たちにピオトープのことを伝えるときは、習ったことを生かしたい。(同様意見 3)
- ・ 1 枚だけの写真の方がわかりやすい時と何枚かの方がわかりやすい時があることです。学校の写真は 1 枚でも、全体と学校の目印があったらすぐ分かります。でも反対に、ピオトープの写真は 2 枚にするとくわしくなってわかりやすかったです。